

香取遺産

Vol.113

圓生涯学習課

☎(50)1224

県立美術館「香取神宮展」

香取神宮ゆかりの文化財が一堂に



▲香取神宮本殿（国指定）



◀双竜文鏡（国指定）

香取神宮ゆかりの宝物や文化財を一堂に集めた特別展が千葉県立美術館で11月17日から平成28年1月17日まで開催されます。そこで今回は、神宮に係る文化財について改めて紹介いたします。

香取神宮は、東国屈指の名社で、元禄13年（1700）に造営された本殿と楼門は国指定の建造物です。

また、宝物館には国宝の海獣葡萄鏡や久安5年（1149）銘が铸出されている双竜文鏡、古瀬戸黄釉狛犬などの重要文化財が納められています。

また、旧社家であった「香取大禰宜家文書」は国指定となっています。

神宮ゆかりの文化財としては、かつて本殿に祀られ、故あって牧野の観福寺に納められた国指定の銅造懸仏4軀（十一面観音坐像・地藏菩薩坐像・薬師如来坐像・釈迦如来坐像）があります。さらに佐原、莊嚴寺の観音堂に安置され、平安仏と呼ばれる

「木造十一面観音立像」は、明治の神仏分離令で廃寺となった「金剛宝寺」の本尊で、これも国指定です。

これらとは別に「香取神宮神宝類」として200余点が県の有形文化財に指定されています。

その中には、伝・亀山天皇宸筆の「香取大明神」額、嘉吉元年（1441）の墨書を伴う扇形の金銅御正躰、唐式鏡の海獣葡萄鏡や伯牙弹琴鏡を踏み返して製作した仿製鏡、草花を描いた和鏡40面なども含まれています。

これらの多くの文化財は、今回の特別展で展示されますが、中でも注目されるのは中世の香取神宮の祭礼を描いた「香取神宮神幸祭絵巻」（香取神宮から津宮に神幸し、御船遊する儀式を絵巻に仕上げたもの）6点が各所から集められ、初めて一堂に展示されます。

また、神宮に奉納された絵画や金工品などの近代美術にも光があてられています。